

日本地衣学会 No.108

ニュースレター

Newsletter from the Japanese Society for Lichenology

目次 訃報	397
黒川道博士の死を悼む / 吉村 庸	397

訃報 Obituary

黒川 道 博士の死を悼む

Obituary. *Syo Kurokawa (1926– 2010) / by Isao Yoshimura*

吉村 庸 (服部植物研究所高知分室)

平成21年9月6日、黒川 道博士は他界された。生前本人の意思により、ごく近いお身内により葬儀が執り行われ博士の訃報は長らく世間に知らされ無かったようである。最近になって、複数の方より、博士の逝去が伝えられた。愛惜の情にたえない。謹んでお悔やみ申し上げます。

黒川博士は日本を代表する地衣研究者の一人であり、多くのすぐれた業績を残している。

黒川 道博士の研究業績を振り返ってみると、戦後の何事も貧しかった昭和20年代に遡る。

黒川博士は当初、日本の地衣類のなかで、研究のほとんど進んでいない、被果地衣類に着目し研究を始めたが^(注1)、文献、比較標本の不足から、なかなか種名を決定できなく、研究は難渋を極めた。

当時の日本では、タイプ標本を見る機会がなく、蘚苔類や地衣類のような下等植物の研究は難渋を極めた。文献を入手してもそれだけでは種の実体を把握することは困難であり、朝比奈先生や佐藤先生も貧弱な原記載文から日本産の種類と同定に苦慮されたものである。ほぼ同時代に地衣類の研究を始めていた私も戦前の佐藤正巳先生の著作^(注2) や朝比奈先生の著作^(注3) を中心に植物研究雑誌に登載されている地衣類関連の論文を手がかりに採集した標本の同定に従事したものである。もっ

とも私はわからない地衣類は朝比奈先生に送り、同定して頂いた。朝比奈先生が私のお願ひした標本を同定されるのを羨望の眼で眺めていたと黒川博士が述べられたことがある。

黒川博士の存在を私に伝えてくれたのは、当時東京教育大学に在学中の同郷の故井上浩博士である。

黒川博士も朝比奈先生のハナゴケ属をお手本にして勉強していたが、朝比奈先生はウメノキゴ属、サルオガセ属をはじめ次々に新しい分野に挑戦し発表される^(注3)ので、なかなか追いつくことが出来ない。それで、黒川博士は独自の分野を切り開こうと考えられた。サネゴケの研究は文献や比較標本の問題であきらめざるをえなかった。そこでZahlbrucknerの体系を逆にしてみるとゲジゲジゴケ属が最初にくるので、ゲジゲジゴケ属をまずはじめに研究することにした。この属は研究をはじめてみると、新たな知見が続々と得られた。

その知見を学位論文とされたが、同時に植物研究雑誌に発表した^(注4)。

日本だけでなく世界のゲジゲジゴケの研究へと発展させていった。

このころ、北米で活発に地衣類の研究をしていたDr. Mason E. Hale ハイル博士との交流が始まった。

ハイル博士は朝比奈先生の顕微結晶法や化学成分と種の分化の問題に関心を持ち研究をすすめ、数多くの論

文をすでに発表していたが、新たに研究対象として、ウメノキゴケ属を選び、世界的な視野で研究しようとしていた。黒川さんとは標本や文献の交換で交際があったが、ハイルは朝比奈先生の伝統を保持する黒川さんの業績に注目し、研究助手として米国に招聘することを企画した。

米国の研究システムでは日本の学術振興会にあたるNSF(全米科学財団)は、研究の必用上、研究助手を雇うことを認めており、このため大学院の学生や外国人を採用することも出来る。大学では教育助手(teaching assistant)や研究助手(research assistant)の制度があり、研究助手はNSFの採択課題のなかで、認められれば研究費の中で支出が可能になる。教育助手は大学の学科で、実験実修の手伝いをしたり、学部の学生を教えたりする。経費は大学の学科経費より支出される。これらの助手は大学院の学生が主として任命される。このような制度は当時の欧米、特にアメリカの大学では普通であった。

ハイルの研究構想は非常に壮大であり、まず、*Parmelia*の各種の基準標本(タイプ)を世界中の標本庫を訪問して探し出し、これを調べる。すべての発表された種類を調べるのであり、それに該当しないものはすべて新種となる。ウメノキゴケ属(広義)すべてというのであるから、膨大なものになるが、そのために必要な文献上の探索はすでにハイルの手によって長年の研究で済ませている。この世界の標本庫の探訪に研究助手である黒川さんも随行する。渡航費用はすべて研究費より支出できる。黒川さんはウメノキゴケばかりでなく、ゲジゲジゴケ属の種類のタイプ標本を同時に調べることが出来る。こんな有利な条件はないので、黒川博士は勇躍してハイルの下に渡米し、研究した。その成果を加味して、発表したのが、世界のゲジゲジゴケ属のモノグラフである^{注5)}。

この論文のすばらしいのは、徹底したタイプ標本 Method に貫かれている点である。論文の形式もタイプ標本を中心に構成されている。このような形式の論文はこの当時の北米研究者の間で理想として論議されていたのであろう。タイプ標本を基にした分類の論文では Hale(1965), Hale & Kurokawa(1964), Culberson W.L. & C.F. Culberson(1968)でもすべて同じような基準標本(タイプ)中心の論文スタイルを示している^(注6)。

このようなスタイルは極めて論理的であり、私もタイプ標本を明確にして論文を構成するのが分類学の論文

ではベストであると信じて、カプトゴケ属の論文でもこのスタイルを踏襲した。

唯一の問題は成分の検出がMCT法のみで、若干の取りこぼしがあるが、これは黒川さん自身の1973年発表の補遺でTLCによる研究で補われている。

ただ、アメリカのW.L. Culberson、オーストリアのPoeltらは*Anaptychia*属の胞子の形状に注目し、胞子壁の薄い種類(*A. palmulata*)を*Anaptychia*属とし、胞子壁の肥厚した種類を*Heterodermia*属^{注7)}として区別した。この特徴は、黒川博士が最初に見出したものであったが、博士はこれを同一属内のSection(節)として区別することにどめた。

黒川博士とHale博士の関係は良好で遊学を終えた黒川博士は一回りもふた周りも大きくなったように感じられた。帰国した黒川さんは世界の*Anaptychia*のモノグラフを完成し、これをNova Hedowigiaの別冊として、発表した^{注5)}。次第に復興した日本と米国との関係も順調であり、日本側は学振が、米国側はNSFが研究経費を分担し、互いに対等な立場で協力する研究テーマを定めて、実施する日米科学協力事業が新たに始まっていた。ハイル・黒川のコンビも世界のウメノキゴケの研究をテーマとして、この事業に応募し、採択されて、研究に従事することになった。

すでに世界中の標本庫を回り、ウメノキゴケ類のタイプ標本を検査していた、ハイル・黒川の両博士は、その成果をHale(1965)^{注8)}、Hale & Kurokawa(1964)^{注9)}として発表した。Hale(1965)はウメノキゴケ類のうちで、大型の裸縁節とされていたグループをまとめて、Hale & Kurokawa(1964)はウメノキゴケ類の属内の分割で、新しく属に昇格させるものをとりあげたものであるが、この基準となったのは、朝比奈先生の「日本の地衣、II.ウメノキゴケ属」で示された属内小分けを基にしたものであるということも出来る。

Hale & Kurokawa(1964)は形質と小分け(新属とすべきもの)との関連を確かめるために、調査した種類毎にパンチカードを作り、形質を各パンチにして、形質間の関連を確かめる方法を採用した。かくして、大ウメノキゴケ類を多くの新属に分割しようとしたが、慎重を期すために従来の属内分類群(infra-generic taxa)のままに留めた(Hale & Kurokawa, 1964)。既知の属内小区分については、個々の種の特徴を詳細に観察する朝比奈先生(Asahina, 1956)以来の日本の伝統であるが、ゲジゲジゴケ属の胞子壁の形状(薄膜か、肥厚壁か)を最重要の形質と定めたことといい、ウメノキゴケ

類の小区分に示した黒川博士の分類学者としての非凡な才能を物語るものである。

因みに、ウメノキゴケ類は、現在では日本産のみでも以下のように多くの属に分割されている。 *Arctoparmelia*, *Bulbothrix*, *Canomaculina*, *Cano-
parmelia*, *Cetrariastrum*, *Flavoparmelia*, *Flavo-
punctelia*, *Hypotrachyna*, *Karooia*, *Melanelia*,
Myelochroa, *Parmelia*, *Parmelina*, *Parmelinella*,
Parmelinopsis, *Parmotrema*, *Punctelia*, *Relicina*,
Rimelia, *Xanthoparmelia*. (詳細は原田他, 2004
を参照)

蜜月状態で万事好調に推移しているとはかりに思われていた、ハイル・黒川両博士の關係に暗雲が立ち込みはじめたのは1966-67年頃であろうか、ハイルの研究助手として、ウメノキゴケ属の研究は順調に進展しており、引き続き、両博士は日米科学協力により、対等な立場で研究が進行されていたはずであった。丁度そのころ、テネシー大学のSharp教授の下に留学していた私はお二人の微妙な關係の変化を感じていた。黒川博士は1967年には再度アメリカ合衆国、首都のワシントンに滞在しており、精力的に研究していた。その前年にはハイル博士は東京に滞在し、資源科学研究所で研究された。フィールド・ワークとしては、ハイルはフィリピン、ポルネオ、インドネシアを、黒川博士はタイ、台湾、マレーシアなどで精力的な採集活動をすすめていた。

不思議なことに、採集行は一度も両博士が一緒に行動することは無く、いずれも単独行であった。

一体両者の間になにが起こったのか、両者共に多くを語ることがなかったので、真相は分からない、両者の不仲は地衣学の発展にとっては残念なことであった。

今更ながら共同研究の難しさを痛感する。

それはさておき、かつて服部新佐先生は生前共同研究について私に次のような言葉で、共同研究を戒められたことがあった。「共同研究を両者50・50、つまり五分五分と考えたらいけない、お互いに40:60とし、自分はある程度4分の利を得るに留めるようにと考えることである。なまじ50:50と五分を確保しようとすると、無理が生ずる。」

ハイル・黒川両博士の共同研究は当初は黒川博士がハイルの研究助手として始まった。ハイルはウメノキゴケ属地衣類の各種の原記載の探索など日本ではとても出来ない文献探索を長年月をかけて自ら済ませており、多大の犠牲を払っていた。ハイル博士は黒川さんを助手として採用し、黒川さんの研究上の多くの障害を除くのに

貢献した。当初予定した、ゲジゲジゴケ属の研究を黒川さんにはもっとやるべきであるとハイルは思っていたが、意外にも黒川さんはさっさとゲジゲジゴケを済ませて、ウメノキゴケ属に入り込みウメノキゴケの研究で多くの業績を挙げて、悔りがたい能力を示し始めた。あたかも庇を貸していたのが、母屋のウメノキゴケにまで乗っ取るように研究を進めてくるのに、ハイルは驚嘆するとともに脅威を感じたのではないだろうか。

ハイル博士の思惑は以上のようなものではなかったかと推定する。一方、黒川博士は、「当初はハイルの研究助手として始まったかもしれないが、日米科学協力は両者対等である。ウメノキゴケ属の細分化により、新しく属として独立させるべき属などは黒川のアイデアである。いつまでも助手扱いでは納得できない。研究は対等であり、自分でそれ相応のアイデアを出すべきである。」このような思いが黒川さんにあったと推察される。

両者の間になにがあったのかは分からないが、思わぬ所に影響が出てきた。1983年に第3回国際菌学会が東京で開催されることになり、国際地衣学会も慣例により同時に開催されることになった。当時の国際地衣学会の会長はMason E. Haleであり、日本側を代表するのは地衣類研究会の会長黒川博士である。日本菌学会(会長 椿博士)からの要請に対して、黒川博士はどうしたことか、協力を承知しない。国際菌学会側からはイギリスのHawksworth博士が仲を取り持ち、黒川さんに協力を要請したが、どうしても承知しない。それで、当時国際地衣学会の評議員であった吉村に対して協力を依頼するという事になっていたらしいが、正式にそのような依頼は私は受けていなかった。だが、日本菌学会の役員さん達はそうはとらなかつた。そのまま、私に文書を回して協力を要請してくる。地衣類研究会としては会長の黒川さんが日本での開催を反対している以上参加はしがたい、このままでは日本の地衣類研究者は世界の地衣研究者から相手にされなくなるのではないかと、国際菌学会をボイコットするのは国際地衣学会をボイコットするのと同じである。八方塞りの感があったが、突如、黒川さんは地衣類研究会の会長を辞任し、次期会長を私に指名してきた。私は渦中に入るのを嫌い会長就任を固辞したが、果たせずに会長の任を果たすことになった。国際菌学会、地衣類のセッション(事実上国際地衣学会の研究発表会)の運営はハイル博士が主催し、滞りなく終えることが出来た。日本人による発表はなかった。ただ、地衣類研究会によるエクスカージョンが日光の戦場が原を中心に実施された。このエクスカージョンは、日

本人地衣愛好者と外国の地衣研究者の交流の場として好評であった。

ただ国際菌学会とは無関係に実施したエクスカージョンであったので、ヘイルは「difficult development」といってこぼしていた。また、せっかく世界の地衣学者が多数日本に来られるのであり、親交を深めるためには何かをする必要があった。

日本ペイントの山本好和さんに相談し、日本ペイント主催で地衣類のシンポジウムを京都の学士会館で実施することができた。資金的には日本ペイントに依存したのが好評であった。

さまざまなことがあったが、黒川道博士の日本の地衣学界において果たした役割は偉大なものがあった。科学博物館には朝比奈先生の所蔵標本が黒川さんの努力によって、立派に整理されて、収納されている。

地衣類の研究は植物学全体のなかではマイナーであり、あまり注目されることがない。黒川道博士の業績は偉大であるが、一般にはあまり知られていないのではなかろうか。しかし、国際地衣学会からはAcharius賞が贈られており、その業績は高く評価されている。国立科学博物館では地衣類担当の管理人（キュレーター）としてばかりでなく、植物研究部長、筑波実験植物園園長として立派な業績を残され、退官後は故郷の富山県立中央植物園の園長職を果たされた。偉大な植物学者としての業績は不朽であり、その業績を称え、ご冥福を祈りたい。

尚、黒川道博士の業績は植物研究雑誌86巻1号に柏谷博之氏の追悼文中に主な業績目録として収録されている。ここでは本文中に関係のある文献の引用のみに留め

た。

- 注 1) 黒川 道. 1955. 秩父産の数種の被果地衣類について. 秩父自然科学博物館研究報告 6:38-42.
- 注 2) 佐藤正巳. 1943. 地衣類ウメノキゴケ目(1). 80pp. 三省堂, 東京・大阪. — 佐藤正巳. 1943. 地衣類ハナゴケ目(1) 80pp. 三省堂, 東京・大阪.
- 注 3) 朝比奈康彦. 1950. 日本の地衣 I. ハナゴケ属, 255 pp., 18 pls. 広川書店, 東京. — 朝比奈泰彦. 1952. 日本の地衣 II. ウメノキゴケ属. 162 pp., 23 pls. 資源科学研究所, 東京. — 朝比奈泰彦・佐藤正巳. 1939. 日本隠花植物図鑑 地衣類.
- 注 4) 黒川 道. 1959. 日本産ゲジゲジゴケ属地衣 (1). 植物研究雑誌 34: 117-124. — 黒川 道. 1960. 日本産ゲジゲジゴケ属地衣 (2). 植物研究雑誌 34: 174-184, pls. 1-2. — 黒川 道. 1960. 日本産ゲジゲジゴケ属地衣 (3). 植物研究雑誌 35: 191-94, pls. 1-2. — 黒川 道. 1960. 日本産ゲジゲジゴケ属地衣 (4). 植物研究雑誌 35(8): 240-243, pl. 1. — 黒川 道. 1960. 日本産ゲジゲジゴケ属地衣 (5). 植物研究雑誌 35(12): 353-358, pl. 1. — 黒川 道. 1961. 日本産ゲジゲジゴケ属地衣 (6). 植物研究雑誌36(2): 51-56. — 黒川 道. 1963. 日本産ゲジゲジゴケ属地衣の検索. 蘚苔地衣雑誌3(1): 1-2.
- 注 5) Kurokawa S. 1962. A monograph of the genus *Anaptychia*. Nova Hedwigia, Beihefte 6: 1-115, pls. 1-7. — Kurokawa S. 1973. Supplementary notes on the genus *Anaptychia*. J. HattoriBot. Lab. (37): 563-607.
- 注 6) Culberson W.L. & Culberson C.F. 1968. The lichen genus *Cetrelia* and *Platismatia* (Parmeliaceae). Contr. U. S. Ntl. Herb. 34: 449-558, pls. 1-25. — Hale M.E. 1965. A monograph of *Parmelia* subgenus *Amphigymnia*. Contr. U. S. Ntl. Herb. 6: 193-358. — Hale M.E. & Kurokawa S. 1964. Studies on *Parmelia* subgenus *Parmelia*. Contr. U. S. Ntl. Herb. 36: 121-191, pls. 1-9.
- 注 7) Culberson W.L. 1968. Chemistry and taxonomy of the lichen genera *Heterodermia* and *Anaptychia* in the Carolinas. Bryologist 69: 472-487.
- 注 8) Hale M.E. 1965. A monograph of *Parmelia* subgenus *Amphigymnia*. Contr. U. S. Ntl. Herb. 6: 193-358.
- 注 9) Hale M.E. & Kurokawa S. 1964. Studies on *Parmelia* subgenus *Parmelia*. Contr. U. S. Ntl. Herb. 36:121-191, pls. 1-9.

●複写される方へ

本誌に掲載された著作物を複写したい方は、許諾を受けてください。詳細は本誌 102号 378ページに。

●Notice about photocopying

In order to photocopy any work from this publication, you or your organization must obtain permission. For details, see No. 102, p. 378 of this publication.

- Newsletter from the Japanese Society for Lichenology, no. 108, pp. 397-400: eds. Harada H. & Kinoshita K., published by the Japanese Society for Lichenology, 30 April 2011.

日本地衣学会ニュースレター 108号

発行日：2011年 4月 30日

編集：原田 浩・木下 薫

発行者・発行所：日本地衣学会

〒203-0021 東京都清瀬市野塩 2-522-1

明治薬科大学 生薬学教室内

©2011 日本地衣学会 (© 2011 The Japanese Society for Lichenology)

本誌記事の著作権は日本地衣学会に属します。無断転載・無断複写等は固くお断りいたします。